

つまり、浮いた状態で存在するのである。このことは、溝がつくられて一定期間経た後何らかの理由で石が崩落した結果なのか、又は故意に置かれたものか定かでない。

こうした浮いた状態の石群を伴う溝は県内では類例がないが、岡山県の辻山田遺跡では同様の例が報告されている。

出土遺物の概要

SK 29 土壙内の東部上端付近にやや平坦面を形成する部分があり、その北壁沿いから出土した鉄器である。断面長方形を呈する。端部は 4×3 mm、折損部では、 5.5×3.5 mm、現存長 3.4 cm を計る。器種は不明。（第 131 図 5）

SK 31 土壙内埋土の中から出土。ほぼ 1 個体分の破片の量がある。口径 16 cm、底径 4 cm、体部最大径 15 cm、堆積高 22.2 cm を計る。口縁部は急激に外傾し、端部 2 条の凹線文を施す。体部最大径付近に 5 個単位の斜行刻文を施す。体部下半部にススが附着する。胎土は緻密であるが、焼成はもろく、暗灰色を呈する。内面の調整は不明である。（第 131 図 6）

穴道町三成遺跡や浜田市伊吉神社脇遺跡出土品に似る。これらは、弥生時代中期後葉のものである。

(3) C 区

埴丘墓群の東側平坦地の調査区である。4 メートルグリッドを設定して調査したところ無数の柱穴と土壙が検出された。しかし柱穴は、全て一定の間隔と方向性が認められないため建物には成り難く、又土壙も不定形なもので墓とは断定し難いものである。出土遺物は古墳時代の須恵器と土師器がある。（第 132 図）

3 号埴丘墓

【遺構】 墓丘基盤 東西下端長 11.3 m、南北長 9.1 m、旧表土を遺存する上部平坦面は、東西 9.2 m、南北 7.65 m、溝溝からの高さは 1.06 m を計る。略長方形を呈する。

溝 東、北、南に所在し、西部には認められない。東の溝は 4 号墳の西の溝と共有するもので上端からの深さ 47 cm、底幅 50 cm を計る。北の溝は 6 号の西の溝と共有するもので、上端からの深さ 62 cm を計る。南の溝は、南側の上端からの深さ 90 cm、底幅 25 cm を計る。溝の堆積土上部には転石がかなり落ち込んでいた。これらの石はもともと埴丘斜面にあった貼石と思われる。

盛土 中央部で 46 cm、埴丘基盤の上部で 35 cm を計る。

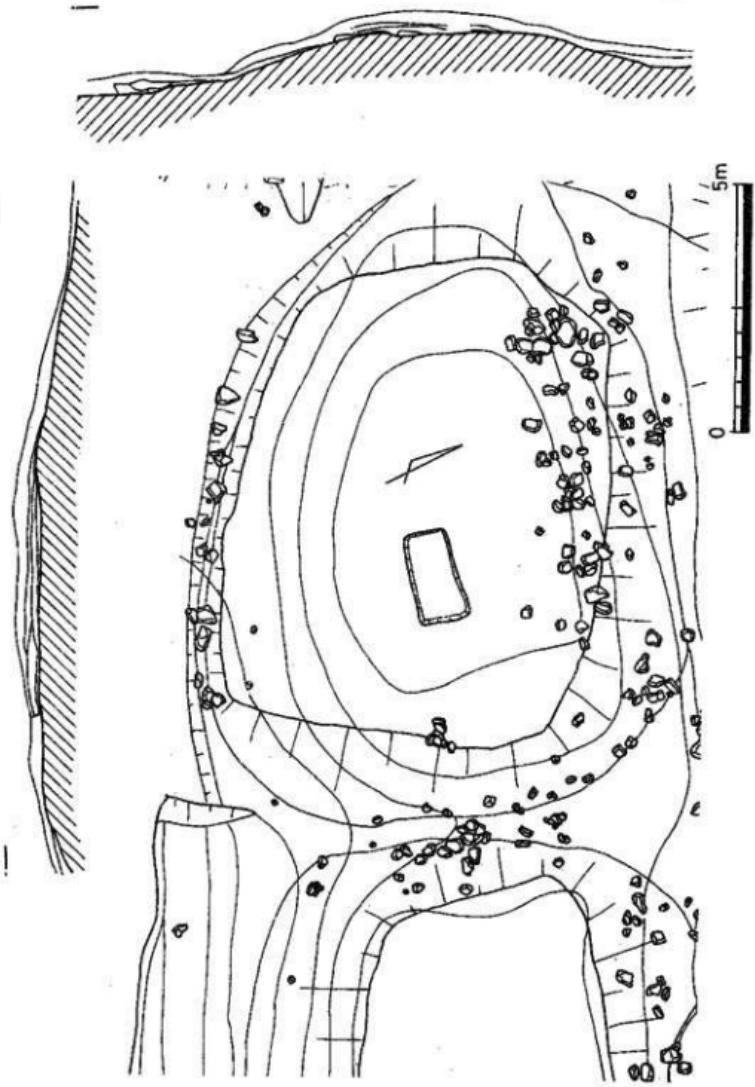
貼石 北側と東側の斜面及び溝中に認められた。溝中のものはもともと斜面に貼りついていたものであろう。

遺構 墓丘基盤のはば中央部に長方形土壙墓が 1 基確認された。長さ 1.8 m、幅 0.97 m、深さ 15 cm を計る。副葬品は皆無であった。

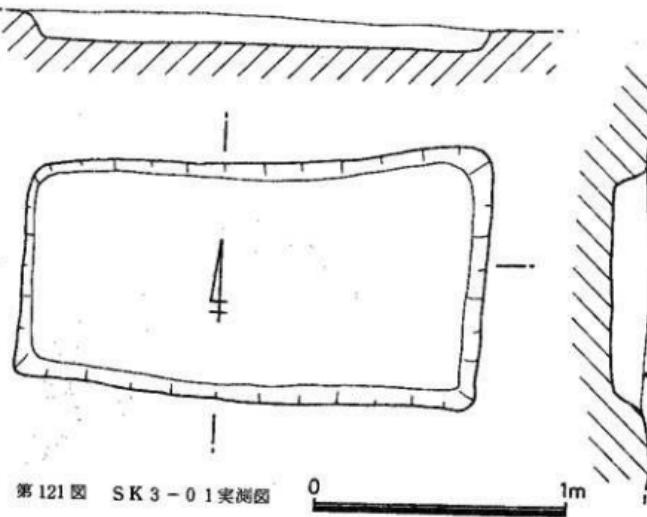
【遺物】 墓丘墓に直接関係した遺物は皆無であった。築成以前の遺物が若干認められた。

1. 4 区の旧表土上面より出土。底径 5.8 cm の台部である。高さ 5 mm、底部の厚み 3 mm、体部の厚み 5.5 mm を計る。細かい砂粒を含み焼成はもろい。褐色を呈する。（第 122 図の 1）

第120図 3号墳丘墓発掘図



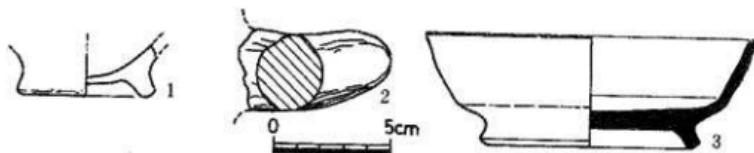
2. 1区の旧表土上面より出土。長さ 6.5 cm、厚み 3.2 × 2.8 cmを計る。炊飯用土器の把手である。
(第122図の2)



第121図 SK 3-01実測図

0

1m



第122図 出土遺物実測図

4号墳丘墓

【造構】

墳丘基盤 東西下端長 12.25 m、南北長 9.25 m、上部平坦面の東西長 10.5 m、南北長 7.70 m、高さは溝底から 0.68 m を計る。略長方形を呈する。

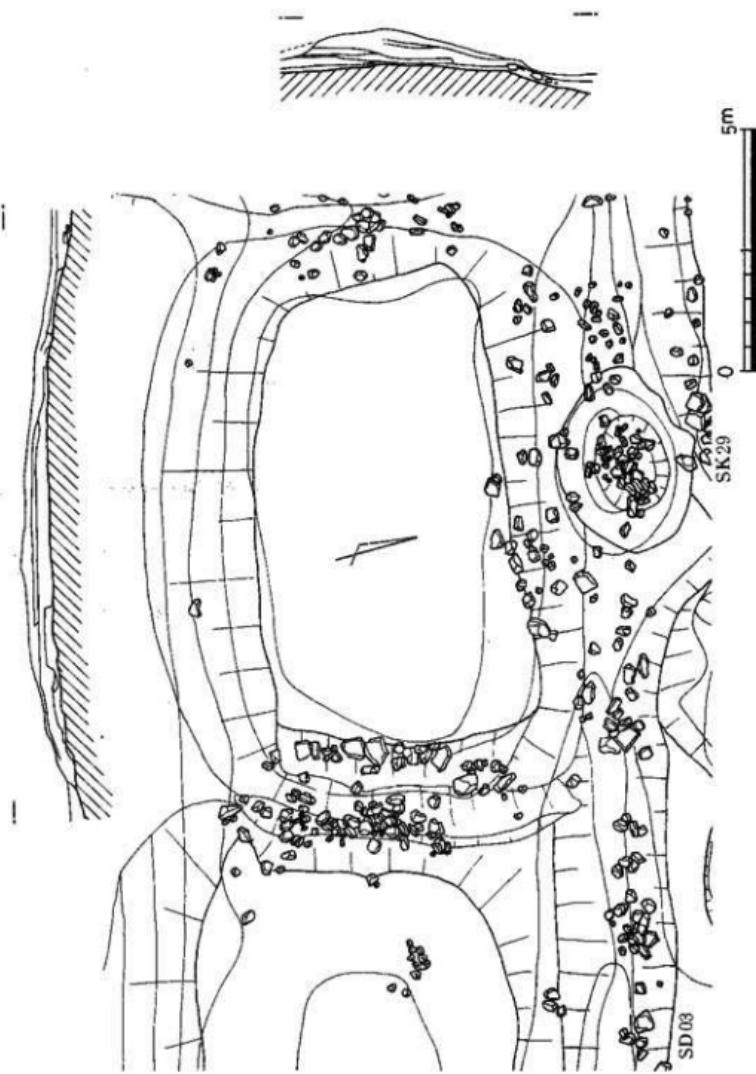
溝 西、北、東に所在し、南側にはない。西の溝は、3号と共に共有するもので、上端からの深さ 47 cm、溝底の幅 50 cm を計る。北の溝は、1号、2号と共に共有するもので上端からの深さ 50 cm、底幅 62 cm を計る。東の溝は、上端からの深さ 40 cm、底の幅 10 cm を計る。

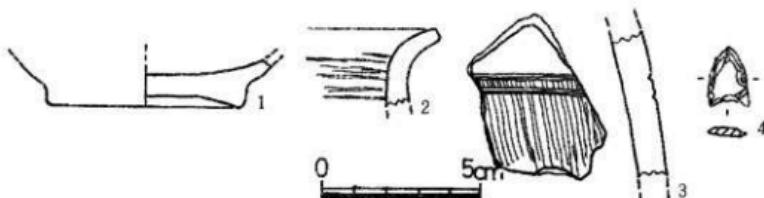
貼石 貼石は大半が溝中に落ち込んでいたが、上端線前後にも比較的大きくてしっかりした石が一列に並んでおり原位置にあるものと思われる。

盛土 中央部で 76 cm を計る。

遺構 主体部は確認出来なかった。

第123圖 4號礦丘素剖面圖





第124図 出土遺物実測図

出土遺物の概要

墳丘墓に直接関係した遺物は皆無である。周溝内から若干出土しているが、供獻されたものとは考え難い。

1. 3区西側周溝付近の旧表土上面から出土。底径6cmでやや上げ底となる。底部の厚み7mm、体部の厚み4mmを計る。
2. 1区の盛土層から出土。小型の菱形土器の口縁部の破片である。口縁部直下の内面は、荒い横方向のカキ目調整を施し、それ以外は横ナデ調整とする。内面黄褐色、外表面暗褐色を呈する。
3. 2区の盛土層から出土。断面V字形となる2条の平行枕線を施し、以下を斜方向の刷毛目調整とする。厚み、0.9~1.0cmを計る。
4. 3区周溝内褐色土層中から出土。長さ1.85cm、現存幅7.5mm、厚み3mmを計る。サヌカイト質の石鏃である。

出土遺物の検討

2は、内面を横方向の刷毛目調整、3は、体部外面に2条の枕線を施すもので、いずれも弥生時代前期後半頃のものであろう。

5号墳丘墓

【遺構】

墳丘基盤 東西南北端長13.15m、同南北長9.75m、上部平坦面の東西長10.75m、南北長6.15m、溝底からの高さは1.39mを計る。略長方形を呈する。

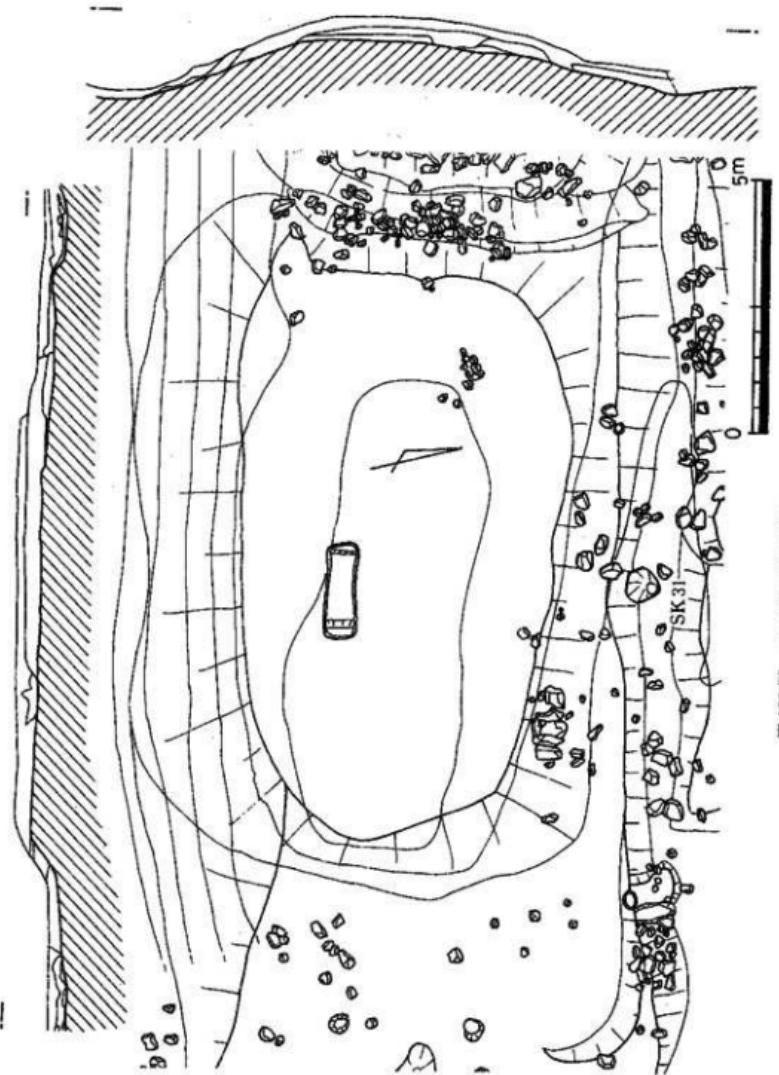
溝 西と北に併在する。西の溝は4号墳丘墓と共に、上端からの深さ40cm、底幅は10cmを計る。北の溝は、2号墳丘墓と共に、上端から深さ34cm、底幅55cmを計る。

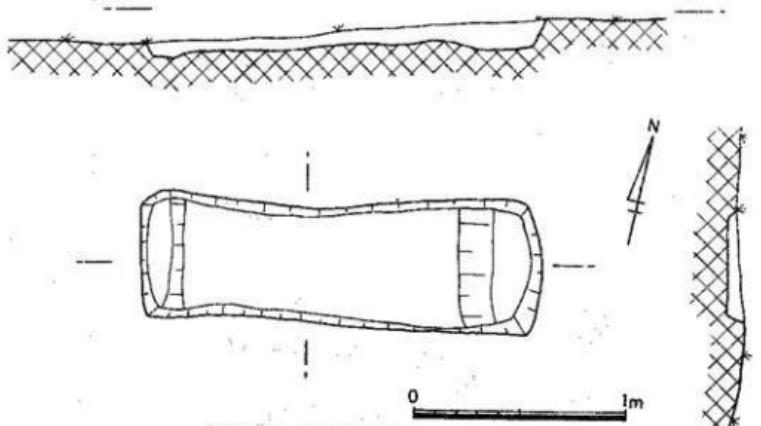
盛土 墳丘中央部で48cmを計る。

貼石 北側の斜面に認められる。特に東部には比較的大きな石が5個並び置かれている。いずれもたて長のしっかりした石で原位置を思われる。

遺構 基盤上のやや東南寄りに主体部が1基ある。長さ1.30m、幅44cmを計る。深さは旧表土をわずかに5cmほど掘り込んでいるだけだが、本来は、恐らく盛土の中途から掘り込んでいたものと思われる。内部に副葬品等は皆無であった。

第125圖 5號堆丘墓實測圖





第126図 5号墳丘墓SK 5-01実測図

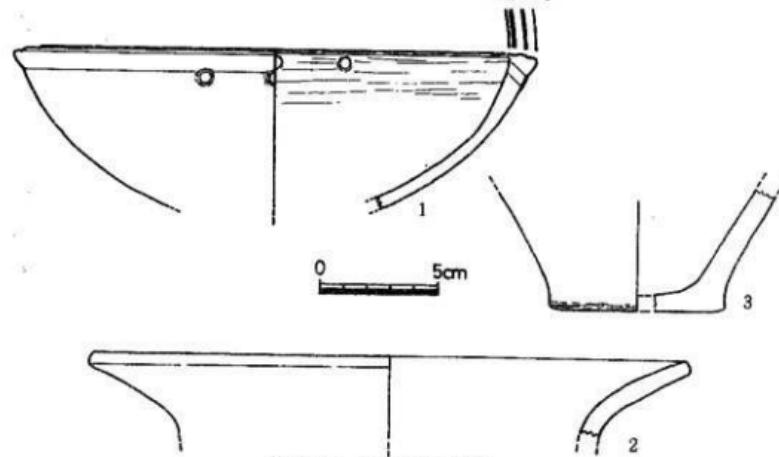
出土遺物の概要

墳丘墓に直接関係した遺物は皆無である。旧表土出土のものが多い。

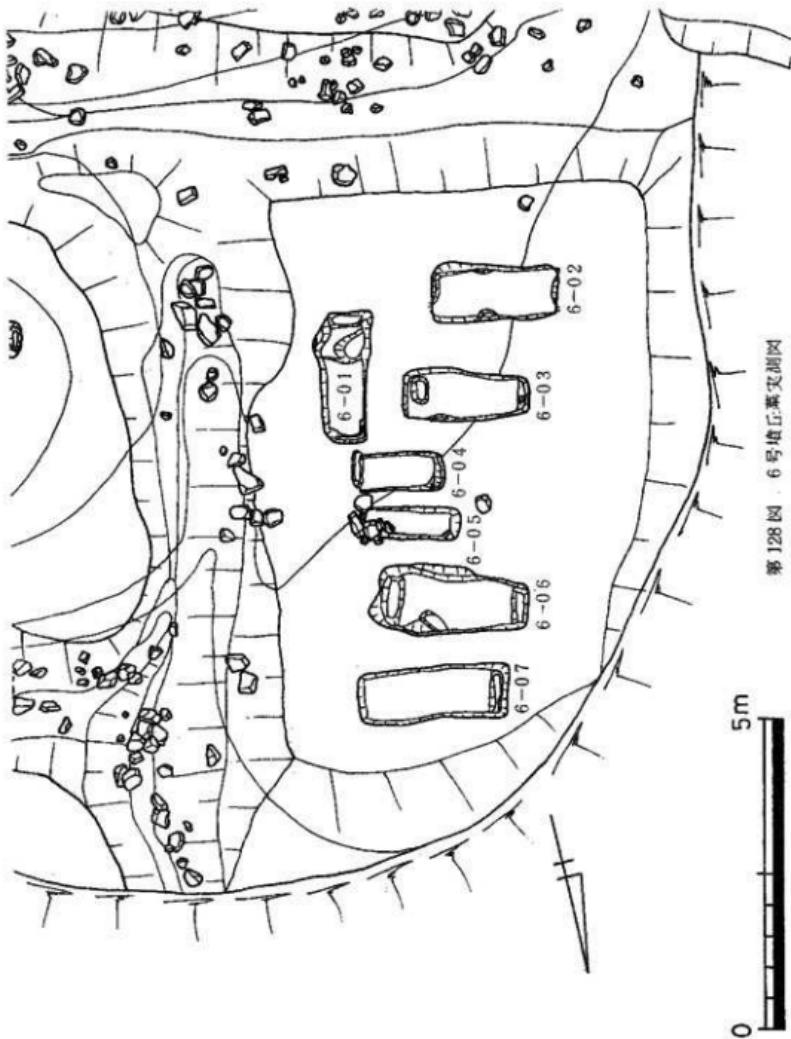
- 1区旧表土上面から出土。脚部を欠く高環形土器の破片で口径19.9cm、口縁端部は平坦であるがやや外傾し2条の凹線を施す。赤色顔料が部分的に塗装されている。口縁端部直下に2.5cmの間隔をおいて、直径4.5～5mmの円孔が2個ずつ計4個穿ってある。

胎土は1mmの砂粒を含み、焼成はやや不良、内外面共に黄色を呈する。

- 2区の黒色土層中から出土。壺形土器の口縁部である。口径25.2cm、厚み6mmを計る。外面は横方向のヘラ磨き調整を施す。胎土は砂粒少なく、明褐色土を呈する。



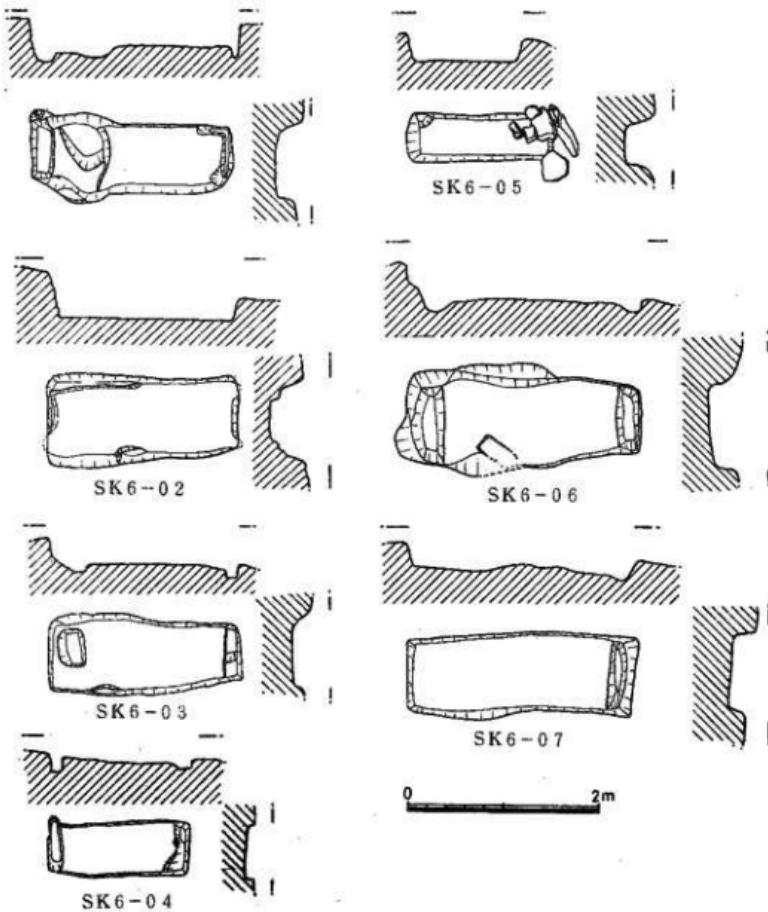
第127図 出土遺物実測図



第128図 6号埴瓦窯跡

3. 3区南側斜面から出土。直径7.5cmの底部である。底部の厚み7mm、体部の厚み9mmを計り、
胎土は、1~2mmの砂粒多く、黄褐色を呈する。

出土遺物の検討



第129图 6号培丘墓主体部实测图

1は、杯部が、半球状で口縁端部が肥厚する特徴を有し、出雲市犬神遺跡、同市下古志遺跡出土の高杯と類似するもので、中期中葉に位置づけられる。

6号墳丘墓

【遺構】

墳丘基盤 東西の上端長6mを計り、西側裾はすでに崩壊している。南北の上端長は9mを計り北側はすでに崩壊している。南北に細長い長方形を呈する。

溝 東と南に遺存する。東の溝は、上端から溝底までの深さ50cm、溝の上端幅70cm、溝底の幅22cmを計る。南の溝は、上端幅280cm、溝底の幅70cm、深さ30cmを計る。

盛土 全体にうすく盛土が確認され、西部に向けて特にうすくなっていく傾向である。SK6-05の直上には石が数箇あるが、これが標石とすれば地山面との間の土層が盛土となり、厚みは42cmを計る。

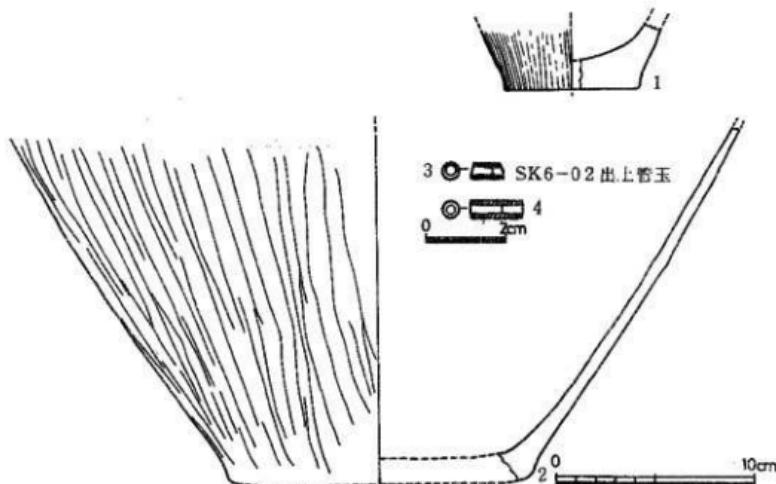
貼石 原位置にあるものではなく、殆んどが溝に落ち込んでいる。ただ上端線付近にあるものはあまり動いていないものであろう。

遺構 法量については第12表を参照してもらいたい。

【遺物】

SK6-02から副葬品として硬質の菅玉が2個認められた以外は、墳丘墓に関係した遺物は皆無であった。

1. 旧表土上面から出土。直径6.7cmの底部である。底部の厚み1.5cm、体部の厚み9.5mmを計る。外面は、タテ方向のカキ目調整を施し、明褐色を呈する。内面は黄褐色を呈する。



第130図 出土遺物実測図

2. 旧表土上面から出土。底径 12.0 cm、現存高 17.8 cm を計る。底部の厚み 1.5 cm、体部上端部で 4.5 mm、下部で 6 mm を計る。外面は、タテ方向へのラ磨研調整を施し、黒褐色を呈する。内面は、調整不明である。1 mm 前後の砂粒多く、焼成は非常に硬い。

出土遺物の概要

土壤内の東部において、床面より 4.5 cm 上方の堆積土層中から硬質の菅玉が 2 個出土した。剣葬品と思われる。3 は、淡青緑色を呈し、長さ 8.25 mm、直径 4 mm、円孔の直径 2.2 ~ 2.7 mm を計る。4 は長さ 1.3 cm、直径 4.5 mm、円孔の直径 2.5 mm を計る。淡緑色を呈する。両者ともに硬質の石を用いた面穿孔でよく磨研されている。

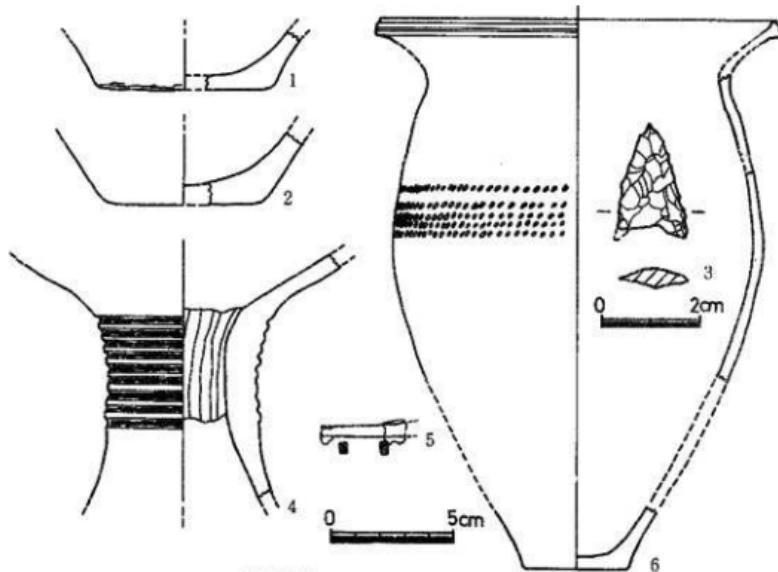
遺物の検討

3、4 は、A 区の SK-04 出土の菅玉と同種で、A 区の他の土壤墓から出土した軟質の菅玉とは石質が違う。長さが、1 cm 前後と短いことから、弥生時代の菅玉であろう。

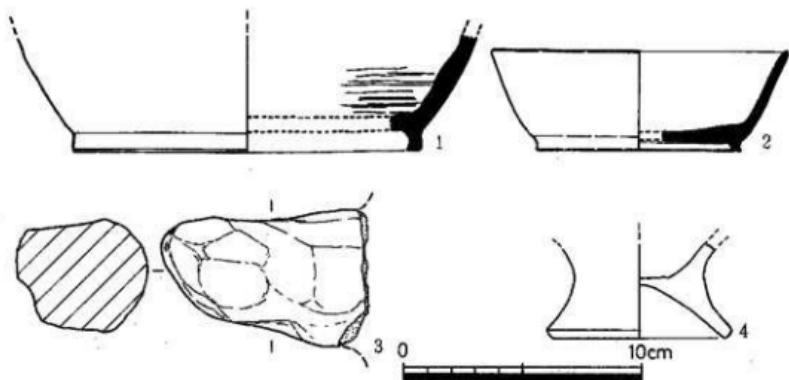
1. 2 号墳丘墓と 5 号墳丘墓の中間にある周溝内の溝底から出土、底径 7 cm、厚み 6 mm、体部の厚み 6 mm を計る。1 mm の砂粒を若干含み、黄褐色を呈する。

2. 2 号墳丘墓 3 区と 4 号墳丘墓 1 区の間の周溝内黑色土層中から出た。底径 6 cm、厚み 9 mm、体部の厚み 8 mm を計る。砂粒少なく、黄褐色を呈する。

3. 1・3・4 号墳丘墓の交わるところの溝中、暗褐色土層中から出土。玄武岩質の石鏡である。長さ 2.1 cm、基部の幅 1.5 cm、厚み 4 mm を計る。



第 131 図 周溝内出土遺物実測図



第132図 C区出土物実測図

貼石方形墓

【立地】

弥生土墳群(26) 墓の所在するA区の丘陵最高所平坦面に位置する。南半部は斜面となっており、遺構は残存していないものの、北半部については、斜面の貼石部と周溝部がよく遺存していた。しながら、主体部と思われるものはついに発見することが出来なかった。

【造構】

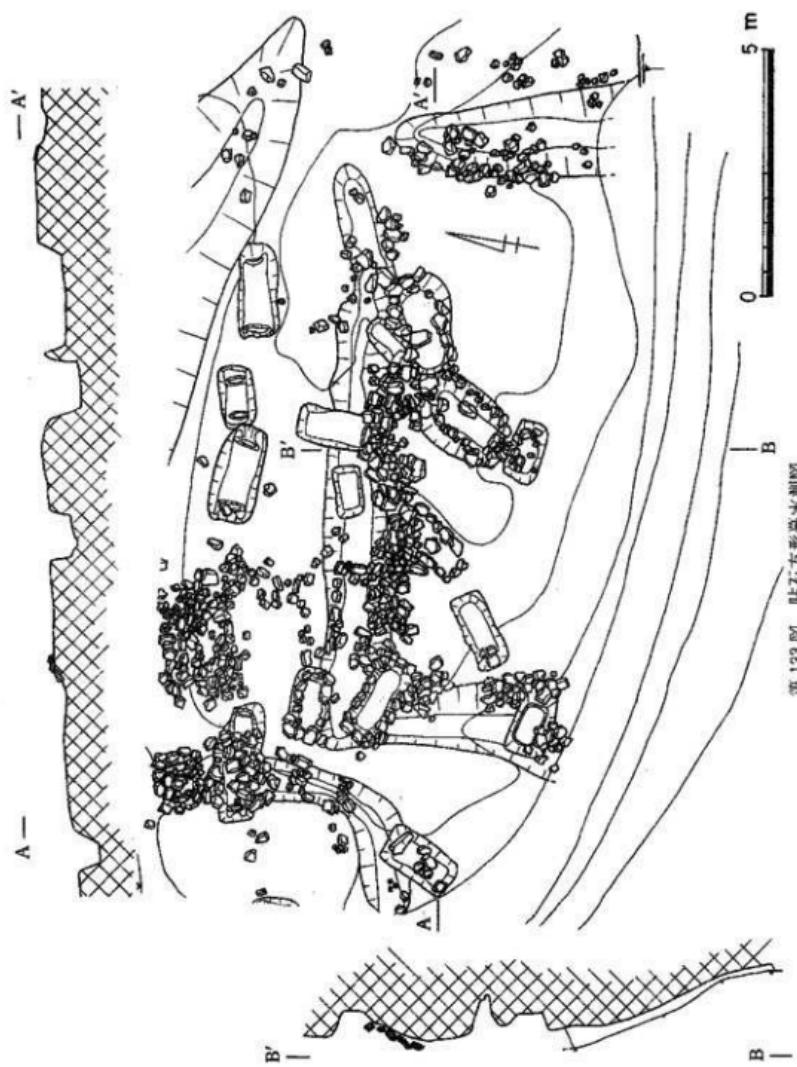
① 基盤と周溝

北半部は、まず東西のさしわたり10.5mほど、南北は、4m以上の墳丘基盤を確保しつつ、その外側に上端幅1.3~1.5m、下端幅20~70cm、深さ35~42cmほどの周溝を穿っている。ここでまず注意したい点は、北西部の隅部はやや外方へ突き出した形をとっていることである。直角の方向でつくられた場合と比較すると30~40cmは外方へ突き出ており、しかも、先端部は恐らくは、やや丸味を帯びてカーブしていたのであろう。この隅部には、以前SK-05が存在しており、その上に16cmほどの黒褐色土をかぶせた後、貼石を配列しているが、その貼石の平面形からみると、鋭くとがった隅部ではなく、カーブした形である。SK-05以外にも、SK-06、SK-19、SK-21、SK-12、SK-11、SK-23、SK-07、SK-08が、貼石と周溝にかかっており、SK-09、SK-10、SK-20は、方形墓の内側の墳丘基盤上に全く含まれてしまっている。一方、墳丘基盤の東北隅部においては、周溝が途切れしており、墓域の区画が全く無くなってしまっている。

② 貼 石

北側の周溝に平行した貼石は、周溝の内側斜面には、厚み9~15cm、さしわたりは10~40cmの板状の転石を貼りつけている。周溝の溝底近くに1~2列の扁平な石を平らにおき、その南側斜面に一部転石を立てるように並べ、さらに、その南側に転石を3~4列している。地山面から貼石までの間

第133図 貼石方形墓測図



には、暗褐色土が1~5cmほど入り込んでいるが、これは地山に石を貼りつける作業過程で石を固定するために盛ったものであろう。

西側の一辺は、長さ3mほど遺存していたが、この側は基本的に3列となり、立石は含まれていない。厚み2~3cm前後の扁平な石が多く使用されている。貼石と地山面との間には、褐色~暗褐色の砂質土が盛られている。

東溝においては、貼石はさしわたし20~30cm、厚み15~20cm程度のやや不均一な角石が配列されているが、崩落して、溝中央部に出張ったものが多く、原位置を留めたものは少ない。したがって本来、何列であったのか、立石が存在したのかどうかはよく分からぬ。原位置の貼石では、地山面との間に約5cmほどの暗褐色土が詰められている。

③ 盛 土

調査前の測量結果では、この部分がわずかであるが25cmほど高くなっていたが、調査の結果、SK-0.8の附近において、盛土が地山面から約40cmあることが確認できた。周囲より高いところであり土壌草群の配石も一部調査前から地表面に露出していたことを考え合わせると、当時から調査に至るまで土がほとんど堆積しなかったと考えられる。盛土は褐色~黒褐色土である。

【遺 物】

基盤上の遺物

SK-0.8と、SK-1.0のほぼ中間で配石の直上の盛土層中から、弥生土器片7点が出土した。表土から、16cm下位にあたる。これら土器片の西隣りからは、やはり同じ深さの盛土層中に22cm×13cm、厚み9cmの丸味のある転石が1個認められた。

土壤草群では、これまで観察してきたように、配石等は伴うものの土壤草の直上で掘り方上面から20~30cm上位において、供獻土器を伴う例は無いので、これらの遺物は、貼石方形墓に関連したものと考えた方がよさそうである。

出土遺物の概要

1. SK-0.8とSK-1.0の中間部直上の土器群の内の一つである。小型の素形土器で体部下半部と口縁端部を欠く。推定器高19.4cm、体部最大径15.4cm、底径4cmを計る。口縁部は、複合口縁となり延長部は、やや外傾するも垂直に近く高さ1.4cmを計る。文様などは、風化著しく認められない。体部は、上部で最大径となり厚み4mmを計る。外面の肩部には、クシ目状工具によるものと思われる斜行刻文がかすかに認められる。内面は、ナデ調整を施しているものと思われる以外は風化が著しく不明である。底部は平底であるが丸味のある立ち上がりを示す。厚みは中央部で8mmを計る。

2. 1と同所から出土。蓋又は蓋形土器の台部もしくは、低脚壺となるもので底部で直径5.4cmを計りその部分から上下にそれぞれ開いていく。上端部、下端部とともに厚みは4.5mmを計る。底部は厚み7mmを計り底内面と器表面に赤色顔料が施されている。底外面には顔料は塗布されていない。

3. 東辺の貼石上で表土から23cm下位から出土。壺又は、高壺の口縁部である。口径16cmで厚み7

を計り、端部は丸味を帯びる。細かい砂粒を含み、明褐色を呈する。

周溝内出土遺物

北側の周溝の底面から、弥生土器の壺形土器が1個体発見された。溝底から4~5cm上の暗褐色土層中に、口縁部を下にして倒立した状態で出土した。土器群の南部は貼石の崩落したものが、上器片の上におおいかぶさっていた。このことから、方形墓が築成された直後に、何らかの理由で、埴丘上から落としたか、又は、葬送儀礼の際、故意に周溝内に逆さまに置かれたのかなどと考えられる。SK-06の南側出土の弥生土器もA区の他の土墳墓では、土墳の直上に土器を供献するという伝統がないことから考えると、あるいは方形墓に関連した遺物ではないかと思われる。

4. 北側の溝底付近から口縁部を逆にした状態で発見。ほぼ1個体分の破片が集中していた。口径24.8cm、頸部径21.2cm、体部最大径は推定で27.2cm、底径6.6cmを計る。推定高は33.5cmを計る。口縁部はやや外傾し、4条の凹線文を施す。下端部は垂れ下がらずそのまま内反し頸部へ続く。この口縁部は厚みが1cmと非常に厚いことが注意される。体部は厚み5mm前後で、肩部に6本単位の角のある棒状工具による斜行刺突文を施す。以下は横ナデ調整を施している。体部内面は、頸部から3cm下方まで横→斜方向のナデ調整が施され、それ以下底部に至るまで斜方向の削り調整を施している。底部は中央部で3.5mmほどの上げ底となっている。

5. 東の溝中出土のもの。溝底から24cm上位の暗褐色土層中から出土。口径12.7cmを計り、口縁部に3条の凹線文を施す。明褐色を呈する小型の壺形土器となるものである。

6. 北の周溝内東部で発見。6から9までは、粗小土器つまりミニチュアの土器である。6は、壺で底径4.3cmの平底を有し、環部はほぼ垂直に立ち上がる。

7. 6と同様であるが、壺部内面に手すくねの痕跡が認められる。

8. 口径9cm、器高4.8cm、底径は推定5.8cmを計る。小型の壺で、口縁部直下で急に厚みを増し外反する。黄褐色を呈し、荒い胎土で、粗砂粒をはじえる。体部内面に指頭圧痕を残す。

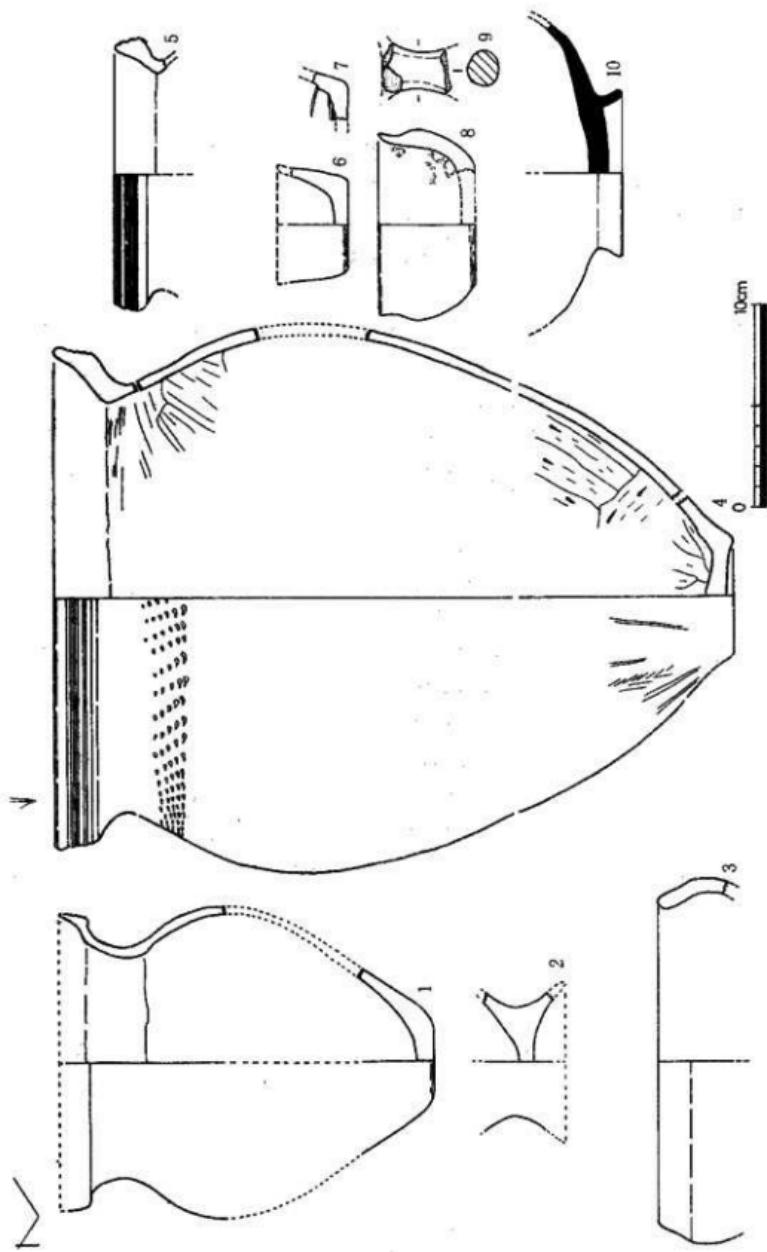
9. 高壺の破片で現存長3.4cmを計る。壺部底内面と脚上半部を遺存する。脚部は1.6×1.8cmの厚みを有し、やや面取り状になっている。

【墳墓の復原】

埴丘基盤の東西長は、先述したとおり、10.5mを計るが、両側の周溝部分を含めるとおよそ墓域は東西長12.5mとなる。主体部については不明というしかないが、前述したSK-08とSK-10の中間で出土した石と弥生土器が方形墓に伴う供獻品であるものとすれば、この付近に何らかの埋葬施設のあったことが考えられよう。

東北隅で周溝が途切れていることや、周溝の西北隅角部がやや外方へ出張り、それにつれて貼石も出張ること、さらに一部立石を伴う数列の貼石施設を設けていることなどの特徴から全体としてこれはいわゆる四隅突出型墓になるのではないかと考える。いわゆる四隅突出型の平面型は、通常正方形ではなく、長方形となるが立地から考えると、長辺は南北方向には出来難いので、現存する東西辺が長辺となり崩壊して斜面となっている南の方向へ短辺が延びていたのであろう。

第134圖 貼石方形墓出土器物契刻圖



遺物の検討

1は、全体的に風化が著しく、特徴をとらまえるのにやや難があるが、口縁部外面は、沈線が入り、肩部にも刺突文をめぐらすものと推定される。全体の器形の特徴は安来市、九重3号土墳出土のものに類似している。弥生時代後期後半頃のものである。

2は、壺又は甕の台部とも思われたが、底内面と器表外面に赤色顔料が塗彩されており、器厚と立ち上がり具合から考えて低脚壺としたほうがよさそうである。1の土器と共に伴するから、弥生時代後期後半のものになるが、今のところ県内では、この時期のもので類例はない。県外では、岡山県神郷町の追跡出土のやや器高の高い低脚壺が似ている。やはり後期の後葉に位置づけられている。

3は、高環形土器の口縁とも思われるが、小片であり詳細不明。

4は、肩部に刺突文を施すもので、江津市波来浜遺跡出土品、邑智郡瑞穂町の順庵原1号墳のストーンサークル周辺の破碎された土器に類品があり、順庵原例は調査者は土師器と考えておられるが、弥生時代の終末期に位置づけられるものではなかろうか。

5は、弥生時代後期後半頃のものであろう。

6から9は、ミニチュア土器である。岡山県に類例が認められる。その時期は、弥生時代である。しかし本例は、周溝内の堆積土の上層から出土し、付近には奈良時代の須恵器片も出土しているので、弥生期の方型壺に関連したものなのか、あるいは、奈良時代頃のものかにわかつ判断しがたい。

3. 遺物の検討

S K 0 6 出土の壺形土器は、弥生後期のものではあるが、体部の大半を欠失しており、文様の有無や調整の仕方について、不明確であり、細かい年代観を得ることは出来ない。（第 110 図 1）

S K 1 3 出土の壺形土器片は、外反する口縁の直下に 5 条以上の平行沈線文帯を施すもので、弥生時代前期後半のものである。（第 94 図）

S K 1 7 の県内出土の壺形土器は、松江市手角町走手（それで）遺跡、八束郡東出雲町下意東の礎近遺跡出土のものに極似する。弥生時代中期前葉頃のものである。

無文粗製の壺形土器は、口縁が逆 L 字形を呈し上面が平坦である。

これらの特徴は、益田・安富遺跡、邑智郡瑞穂町順庵原 A 遺跡出土の壺形土器にみられ中期前葉のものである。（第 99 図）

S K 1 3 の高杯は、脚部に三角文を刻み込んでいる点が特徴である。この三角文は内面にまで到達していない。類例としては、松江市東津田町の石台遺跡出土品がある。県外では岡山県、滋賀遺跡、同、上伊福遺跡などにみられ中期後葉頃のものである。（第 110 図 2）

S K 1 8 の土壤内埋土中出土の壺形土器は、体部の最大径直上付近に沈線文を設ける点が特徴である。県内では、邑智郡瑞穂町の順庵原 A 遺跡や鹿島町古浦遺跡で出土したものに類例がある。弥生前期後半のものである。（第 110 図 4）

他に A 区周辺の丘陵斜面からは次のような遺物が出土している。

5 北西側丘陵先端部の斜面から出土。口径 25.2 cm を計り、口縁がラッパ状に開く式の壺形土器の口縁部の破片である。端部には、2 条の回線を施し、内面はヘラ磨研調整を施し、外面は、黄褐色を呈する。（第 110 図 5）

6 北側斜面から出土。ほぼ直立する口縁端部に 3 条の回線文をつける。下端部は、2 mm ほど外下方へ出っ張る。明褐色を呈する壺形土器の口縁部であろう。（第 110 図 6）

7 2 と同じ地区から出土。壺又は、壺形土器の口縁部の破片である。口径 17 cm で口縁直下で一度外反し、その下で再び内反する。（第 110 図 7）

8 北側斜面から出土。須恵器の壺形土器である。口径 16.2 cm、底径 12 cm、器高 2 cm を計る。底部は、回転糸切りによる切り離し。体部下半部は、斜めナデ、上半部は、横ナデ調整を施す。内面は、体部が横ナデ、底部が斜ナデ調整を施す。（第 110 図 8）

9 南側斜面下の谷部で表探したもの。青磁の瓶の破片である。内外面共に分厚く青い釉をつける。外面には、タテ方向に細い線が刻まれている。内面には断面三角形の見込みに至る沈線が 1 条まわっている。（第 110 図 9）

A 区の外周斜面から出土したものの内、5 は後期前半頃、6 は弥生後期のもの、7 は不明、8 は奈良時代のものであろう。

4. 遺構の検討

1. 墳丘墓群について

今回B区で発見された墳丘墓群は東西方向に3基ずつ連接したものが南北2列に並んでおり、お互いの溝を共有し形態的にも同じものであることから、それぞれは何らかの深い関係にあった同族集団の墓地であることが考えられる。

そもそも「墳丘墓」とは、岡山大学の近藤義郎教授によって提唱された呼び名で弥生時代において墳丘を有するなど古墳に近似した形態の墓を、便宜上区分したものである。

形態上の特徴として、(1)地山を切削加工し墳丘基盤を形成する。(2)盛土を有する。(3)周溝を有する。(4)墳頂に列石、貼石を設ける。(5)弥生土器を出土する。以上の点が挙げられるが、友田の墳丘墓群はこれらの全ての条件を満たすものである。

各墳丘墓の主体部からは、土器など年代を示す遺物は皆無であった。わずかにSK6-02で破片の管窓が副葬されていたが、弥生時代の菅玉である以外には、幅の狭い年代縦を得ることは出来なかった。一方周溝内からは、土器がかなり出土している。この中には周溝内に供献されたもの、あるいは墳丘墓上面にあったものが転落したと思われるものなど墳丘墓の築造時期に最も近い年代を示しているものがあるので、個々の土器について少し年代に触れてみたい。

第118図4のものは、2号墳丘墓の北側斜面から出土したもので無頸壺である。クシ目文を豊富に施しており、弥生時代中期中葉頃の土器である。第113図1、2は、高环の破片で、半球状の坏部の特徴から弥生時代中期中葉頃のものである。第113図7は、豐形土器で、1号墳丘墓西側の周溝内底面から出土し、体部穿孔を有するものである。恐らく当初から溝底に置かれたものと思われる。これは口縁部に円型浮文を付けるなど中期的色彩を残すものの全体の器形としては後期型であり、後期前に位置づけられるものである。

一方、墳丘基盤の表層を成す黒色土層や盛土からは、弥生時代前期後半頃の土器片が出土しており、築造直前の時期を示すものである。

以上のことから、本墳丘墓は弥生時代中期中葉頃から後期前半頃にかけて連続漸起的に築造されたものであろう。

こうした墳丘墓は、現在、岡山県、広島県を中心に確認されており、島根県内ではいわゆる四隅突出型方墳は墳丘墓に属するものであるといわれている。

本墳丘墓は、これら墳丘墓の中でも最古の類に属するものであろう。四隅突出型方墳が墳丘墓の範ちゅうに含まれるものとしても、本墳丘墓とは形態を異にし、その系譜も違うものである。今のところ県内には同じ形態の墳丘墓は見当らない。周溝内出土の土器は山陽地方の影響下に成立したもので、県内の出土例が少ないと、当地での弥生時代前期から中期にかけての遺跡のあり方をみて、他にさきがけて社会構造の変化があって支配者が台頭してきたとは思えず、少なくとも自主的、土着的な発展の結果とは考え難い。

現在のところ、山陽地方にその類例が多いことから山陽側からの影響の下に成立したものであろう。

2. 土墳墓について

A区で検出された26基の土墳墓は、その形状の差異から5種類に大別される。すなわち、第1類は石を伴わない長方形土墳墓、第2類は配石、標石、結石を伴う長方形土墳墓、第3類は石郭、第4類は標石のみを有する土墳墓、第5類は梢円型土墳墓である。

第1類は出雲地方に通有の土墳墓である。6基を数えるが、それらはお互いに隣接しており密接な関係にあったのである。

第2類は10基を数え、本遺構群では支配的な墓制である。結石は、墳底付近において本棺の板と上端の掘り方とのすき間に石を詰めて本棺を固定したもので、SK-08、SK21などにわずかに見られる。配石は、土壤内に棺を安置し土をかぶせて平坦にした段階で本棺の側板上方から土壤の掘り方の上端線にかけての範囲に長方形に比較的扁平な石を配列したものであるが、結石のように実質的な機能は果していない。恐らく墓域を地表面で標示したものであろう。

又、標石と呼んでいるものは土壤内に土をかぶせた後、墓壇の中央部に大きな石を1個置くものである。しかし、石を立てて置いたのではなく、水平方向に寝かせた状態で検出されていることが注意されるが、もともとは立っていたかも知れない。同様の例はB区の1号墳丘墓のSK1-01や、6号墳丘墓のSK6-02でもみられた。

このように、石をふんだんに用いて墓を形成する方法は出雲部では例がない。安来市、九重土墳墓では埋葬後の土器供献をした際に、土器群の中央に小さな石を立てて置くという一種の標石が認められるぐらいで、長方形の配石や結石は類例がない。

配石の例は、県外では広島市高陽町の西願寺遺跡群中、D13、D14や三次市の松ヶ迫遺跡群中ST1、ST7などに類似した配石遺構がみられる。

第3類は、側石を2～3段積み上げるもので天井石をもたない。そのかわり、SK03、04では石郭の上部を土でおおった後扁平な石を石郭の直上及びその周囲に重ねておおっている。こうした例は、SK14、SK26にも認められた。

SK14とSK26では、両者の墓壇の直上に一体となっておおわれており、区分できなかった。SK03では、内部に掘り込みはなく木棺を組み合わせて置いた可能性は全くないが、こうした扁平な石で上部をおおう仕方のものはお互いに隣接しており、関係の緊密な1群として抽出することが出来る。こうした類例は県内にはない。県外では前述の、西願寺遺跡群や、松ヶ迫遺跡群で認められる。

第4類は、通常の長方形土墳墓であるが、壇内を埋め戻し平坦にした後、土壤直上に石を数個置くものである。第1類にみられた標石と同様の性格をもつものであろう。

SK06、SK20、SK22にみられる。

第5類は、梢円形土墳でSK01、SK16、SK17の3基を数える。SK16は、さわわたし60cmと非常に小さいものであるし、SK17は袋状の土壤で弥生中期前半の臺形土器を1個埋納する

もので、時期的にも、形態的にも他の土壙墓とは相違する点が多いので、この2者は墓とは必ずしも断定できない。SK 0 1についても同様のことがいえる。

そこで次にこれら土壙墓の築造年代を考えてみよう。副葬品としては、菅玉、勾玉、石鐵があり土壙墓周辺の復土から出土したものに弥生土器がある。菅玉、勾玉、石鐵はいずれも弥生時代後期頃に通有のものである。又、SK 1 3付近出土の高杯の脚部は、やはり弥生後期前半頃のものと思われるから、これら土壙墓群は後期前半を中心とした時期に營なされたものと思われる。これらの土壙墓は規模の上では大小の差はあるにせよ格別かけ離れたものがあるわけでもなく、構造的には壇内に木棺を組み合わせ置くものであり、狭い舌状丘陵上に群在しているから、恐らく単一の集落単位の集団墓地であったと思われる。

第1類から第5類まで区分されるようにバリエーションのあることは、同じ集団内にあっても主流を成すグループと傍系のグループのあったことをおわせる。いまこれらのグループの分布を平面的に見てみると、第81図の如くであるが、この図から第2類の土壙墓が丘陵の中央部を直線上に群在している。それ以外のグループは、第2類の土壙墓の左右外側の丘陵斜面にかかる場所に立地していることが読みとれる。

第2類のグループは、配石、標石、結石を有しもとも複雑な形状を示す上、副葬品もSK 0 8に見られるように200個以上、恐らく破片の量から推定すると400個前後の菅玉と、11個の勾玉をもち、7個の石鐵も見つかるなど量的にもっとも中心を成す墓であることから、この第2類のグループが主流を成していることがわかる。

第2類以外の傍系グループでは、第1類の内菅玉を61個副葬していたSK 24、第3類の内菅玉を115個副葬していたSK 1 4、第4類の内菅玉を38個副葬していたSK 2 0が副葬品の量からみて、それぞれのグループの中では中心を成す墓であったろう。

3. 貼石方形墓について

墳丘の南半部と主体部を欠失しているが、遺存する北辺では一辺約11mを測り、周溝を設け墳裾に貼石を施し北西部の隅がやや突出するという四隅突出型方形墳と断定した。

こうした四隅突出型の墳墓は西日本や北陸地方に分布し、弥生時代中期から古墳時代前期に至るまで、現在のところ30例（本遺跡を含む）を数えるが、その中でも本例は特に貼石や突出部の形状からすると初期の段階であり、しかも北の周溝に落ち込んでいた甕形土器や盛土上層の土器をみると弥生時代後期後半に属するものと思われる土器であり、木墓もその頃に築成されたものであろう。ところで、こうした四隅突出型墓については特に貼石の構造、四隅突出部の形状などから川原和人氏はこれをA、B、C類に分類され、その順に変遷したものと考えられている。

本例は、貼石を斜面に三列もしくは四列に並べておき、その下段近くに一部立石をたてるものである。墳裾に梯状の石列は見当たらない。

さらに、四隅突出部が極端に突出せず大きい扁平な石も存在しない。これらの形状から考えるなら

ば順庵原1号墳よりもやや古い段階のものではなかろうか。

松江市内では、矢田町に所在した米美1号墳があるが龍尾II式の土器が検出されており、本例の方が格段に古くなる。

ここで注意すべきことは、A区の土壙墓群の内12基の存在を無視しその上部に突出墓の貼石列や溝がつくられていることである。

それぞれの被葬者をとりまく集団が血縁関係などによって強いきずなで結ばれているとすれば土壙墓の立地と重複せずに突出墓をつくるはずである。

本例の場合、弥生後期の後半の時期に土壙墓をつくり得た集団内部もしくは外部勢力との政治的関係の変化があり、土壙墓集団と対立する特定権力集団によって構築されたものと考えられる。

5. 小 結

本遺跡は、調査の結果、弥生時代中期から後期に至る墳墓群であることが判明したが、これまで、県内における弥生後期の墓制としては、安来市・九重（くのう）遺跡、江津市・波来浜（ならはま）遺跡、邑智郡瑞穂町の順庵原（じゅんなんばら）1号墳などがわずかに知られていていたに過ぎない。その意味では、県内はもとより、西日本地区でも今後の研究上無視出来ない遺跡である。

1) 墳丘墓について

墳丘墓又は、台状墓と呼称されるものは、広く西日本地区で、弥生時代中期後葉から開始されているが、本例は、こうした中で、時期的に最古の部類に属するものである。

これが、土着的な墓制だとしても、はたして自主的に発展した結果の所産であるのか、又は、他地域からの影響のもとに成立したものなのかは、今後の検討課題である。

さらに、それぞれ7基の主体部をもつ、1号、2号、6号墳丘墓から、1基程度の主体部をもつ、3号、4号、5号へと年代的に移行していくことが事実であるならば、これは、特定集団墓から、特定個人墓へと変遷していく過程を物語るものと云える。

2) 土壙墓群について

第1類から第5類まで類別したが、この内第2類が最も主体となるグループの墓ではなかったかと考える。このことは、集団内部でもある一つの特定グループ、つまり、集団全体に対して、指導力、影響力の強いグループが台頭してきた過程を示すものである。

これらの形成された時期は、弥生時代中期前半から後期にかけてである。弥生時代中期前半のものは、SK17であるが、断面フラスコ状の橢円型土壙であり、墓としての機能を有するとしても單発的なもののように思える。

主流を成す、第2類の土壙墓群は、周辺出土の土器から判断すると、中期後葉頃から開始され後期に至っている。とすると、さきの墳丘墓群と相前後して形成されたこととなり、その関係が問題とな

る。

そこで、両者の立地を平面的にみてみると、墳丘墓群が、丘陵の基部、土壇墓群が丘陵の先端部に立地し、両者は、重複していない。恐らく、当初から一つの丘陵上で墓域の区別けがなされたのである。その背景には、弥生中期の頃にすでに特定集団を構成していたグループと、それ以外の大多数のグループとが共に共存していたことを示すものであろう。

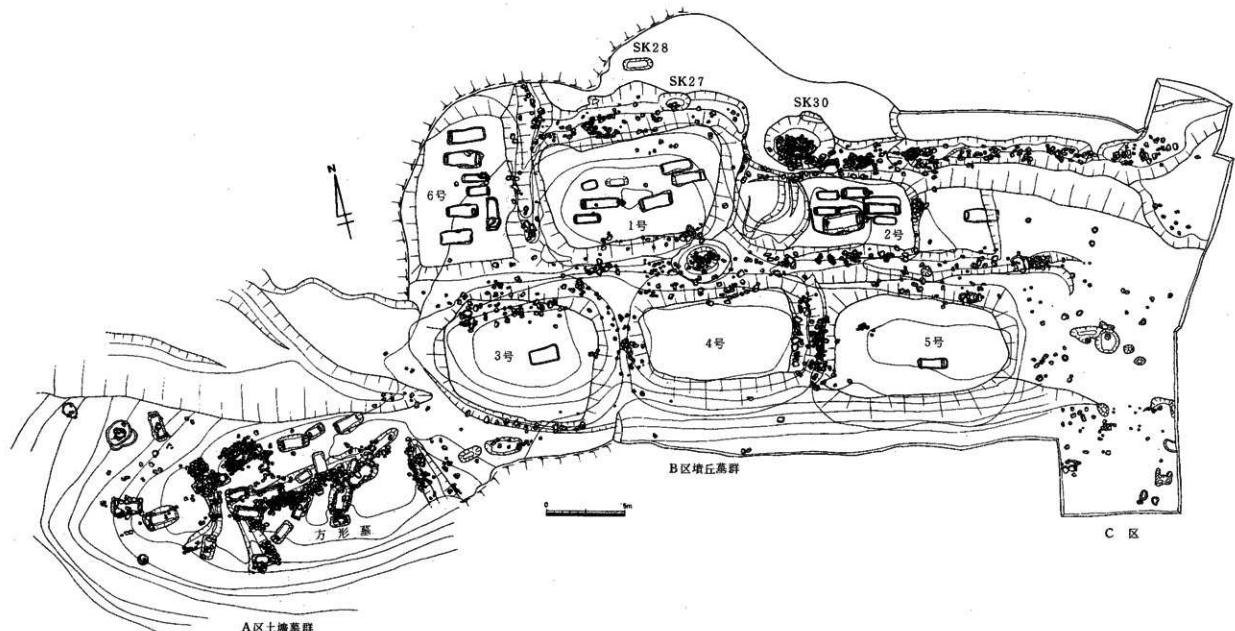
3) 四隅突出型方形墓について

四隅突出型方形墓は、山陰、北陸を中心として、これまでに29例が確認されており、本例で30例目となる。

本例は、盛土上部及び、周溝内出土遺物から弥生時代後期後半頃の築成になるものである。貼石や四隅突出部の形状から考えるとやはり古い段階のものであろう。

特に注意される点は、前述の土壇墓群の存在を全く無視し、その上に築成されていることである。このことは、土壇墓群と、方形墓との間に政治的に断絶した関係があつて、少なくとも血縁的な関係はなかったのではないかと考えられる。

いずれにしても、墳丘墓と、土壇墓と、四隅突出型方形墓の三者の間の関係は、今後さらに検討していく必要があろう。

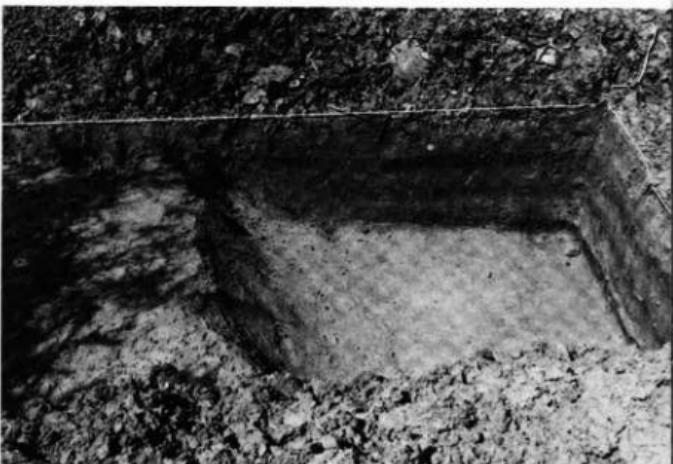


第135图 灰田遗址勘探调查成果图

下沢遺跡遠景
(北東からみる)



同上
C トレンチ



同上
D トレンチ





下沢遺跡
Aトレンチ



二子塚古墳
近景（調査前）

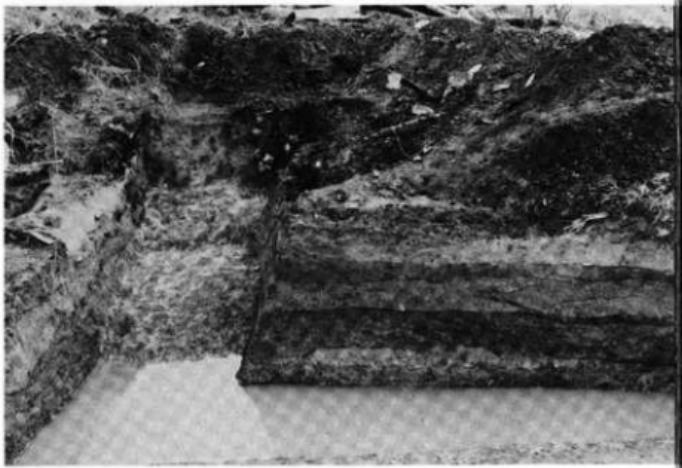


同上
東南部墳丘盛土

墳丘基盤上
土師器出土状態



南 溝



長砂第1支群
(左の丘陵上)
遠 景





1号墳
主体部



3号墳
主体部

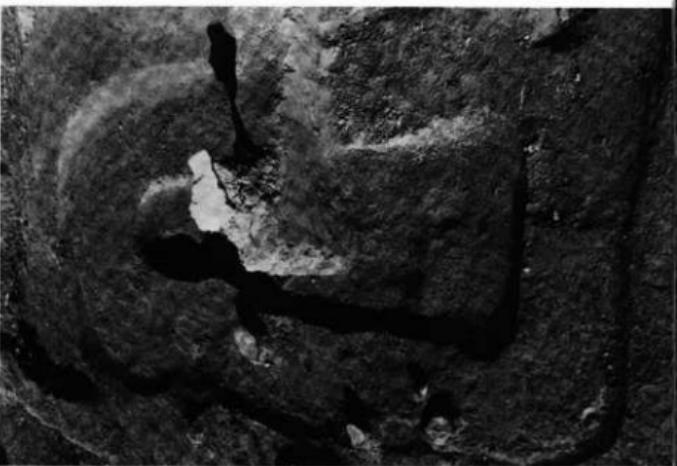


4号墳墳丘
(調査前)

4号墳
西北部
埴器遺物出土
状況



5号墳
主体部



6号墳
主体部

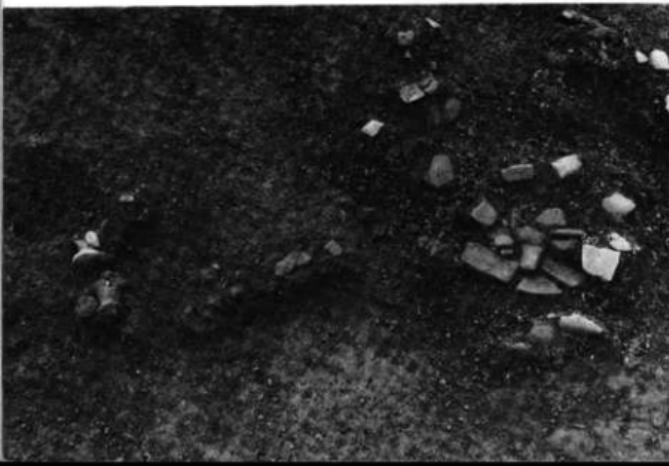




7号墳
主体部



7号墳
填丘



8号墳 墓
遺物出土状況

9号墳
主体部



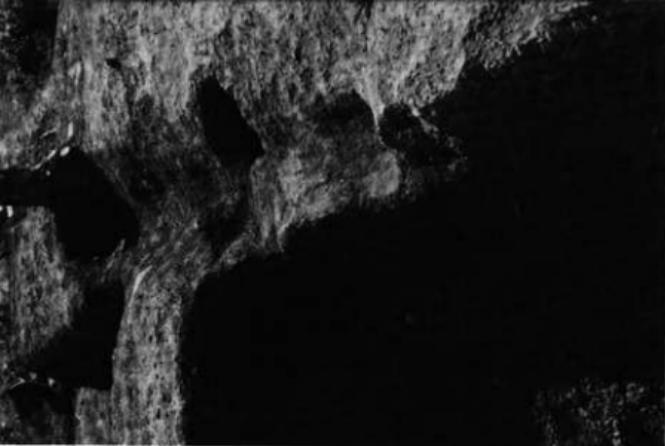
9号墳
西溝



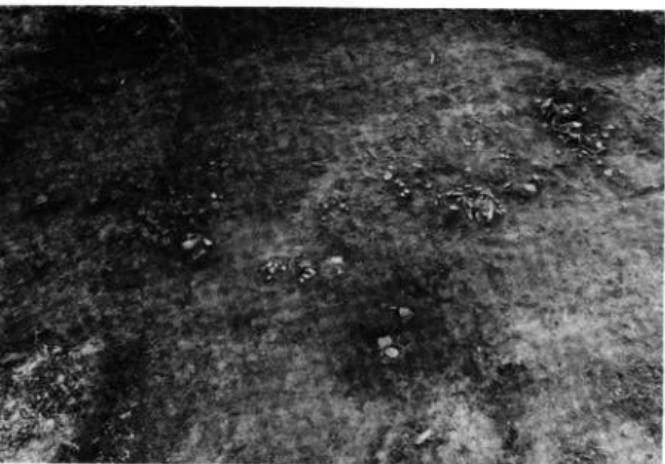
10号墳
墳丘



11号墳
主体部



11号墳墳體
遺物出土狀況



同上



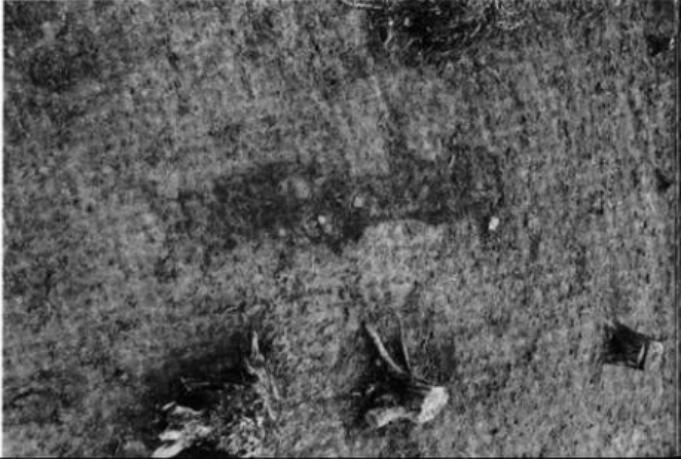
11号填
填 壤



13号填
主体部



14号填
主体部



14号墳
北溝



手前 15号墳
向こう 14号墳



15号墳
主体部





18号墳
墳丘



18号墳
主体部



18号墳
墳丘基盤



長砂 18号墳
墳丘基盤



潜松古墳推定地
調査状況



同上E区
V字溝

後友田古墳
遠景(調査後)



同上
北 部
墳丘基盤



同上
墳頂遺物出土
状 態





S区
須恵器大甕片出土状況



同上



SK-01



友田遺跡航空写真（左下 向原古墳群）

向原古墳群

友田
遺跡

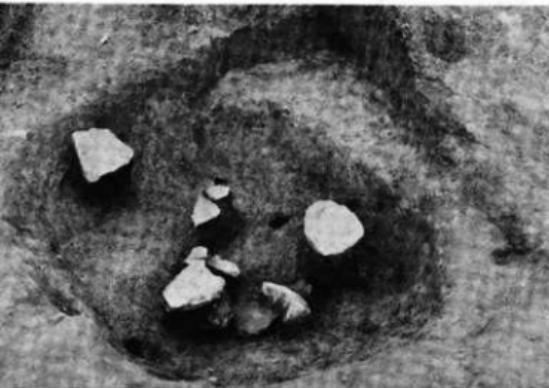
南友田遺跡



友田遺跡ほか
遠景(西からみる)



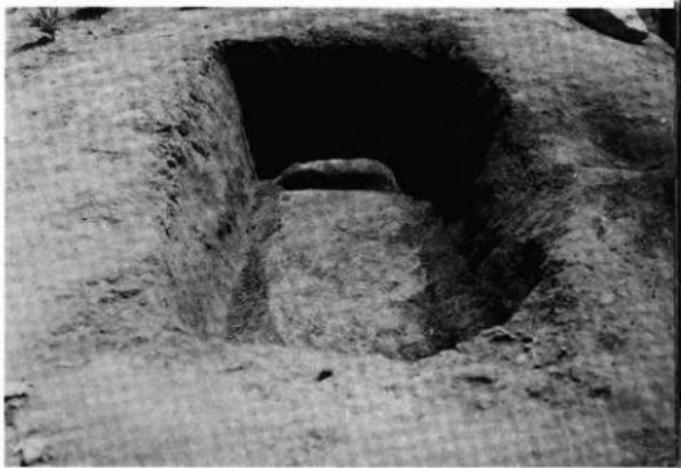
土壙墓群近景
(石列は貼石方形墓)



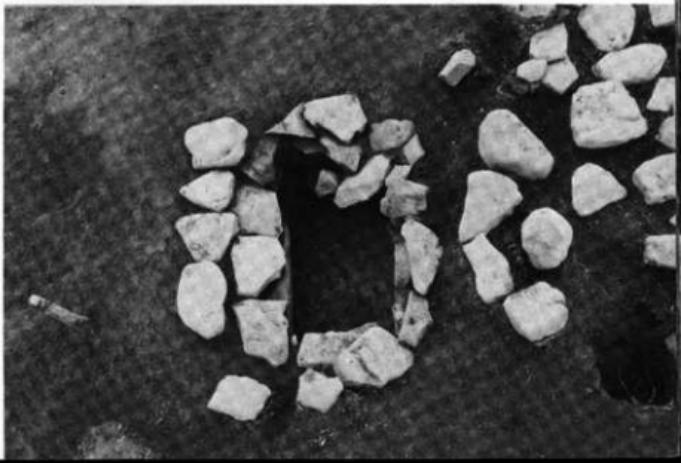
SK 02



SK 02

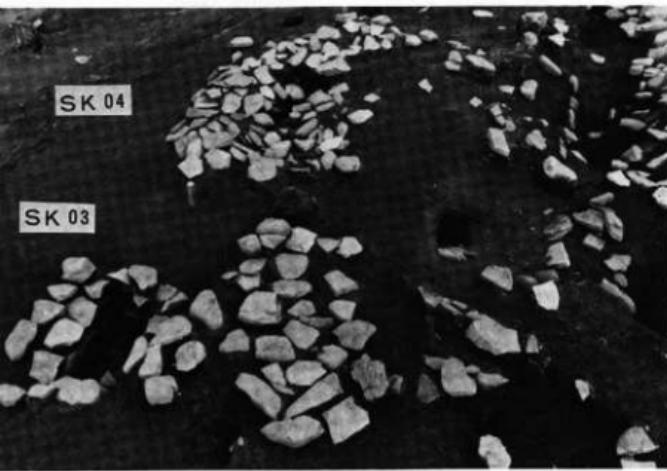


SK 03





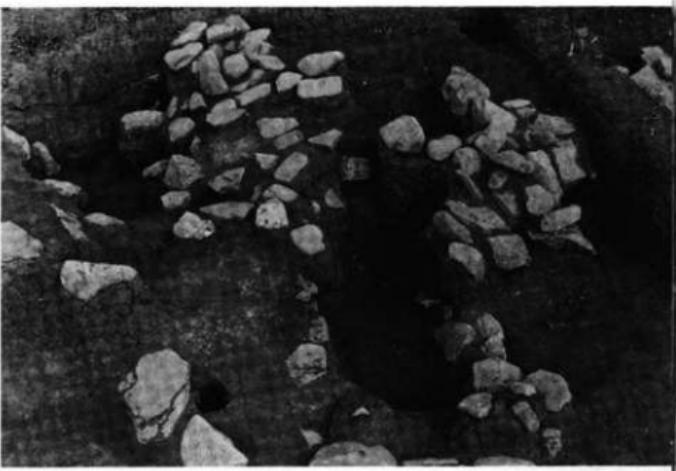
SK 03



SK 04



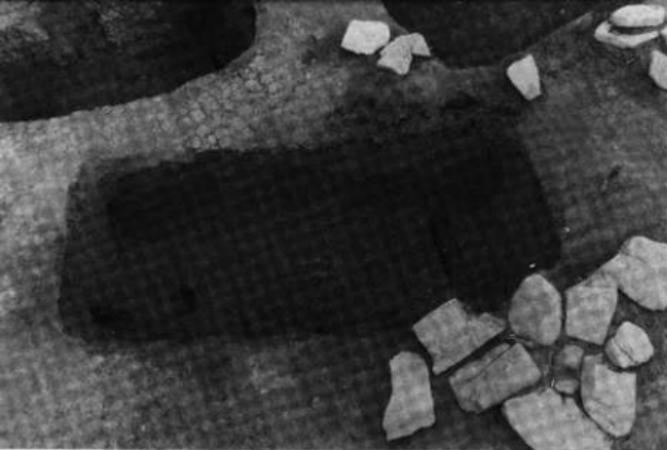
SK 04



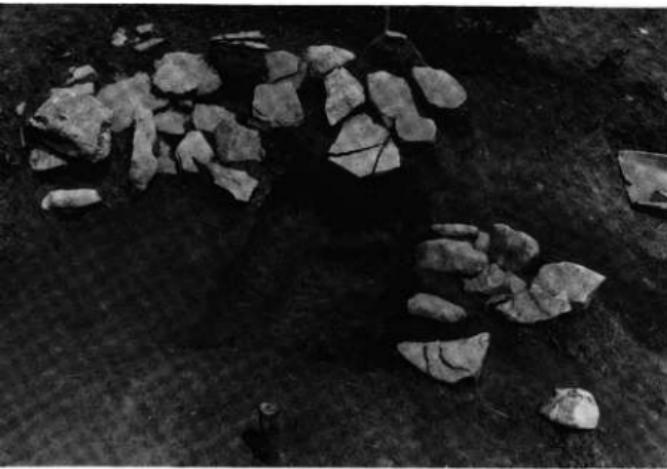
SK 05



SK 05



SK 05

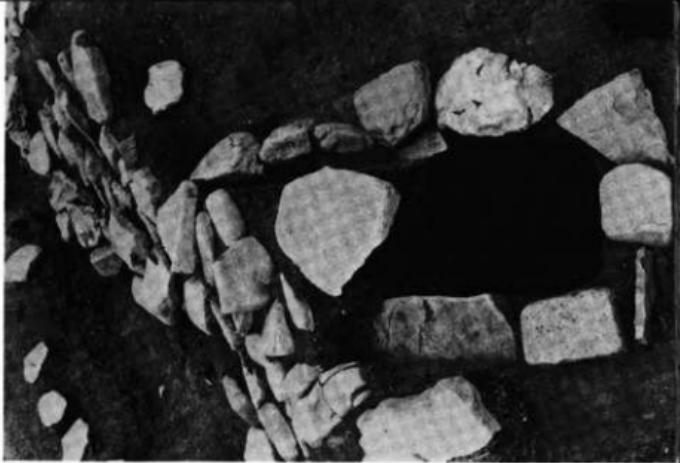


SK 06

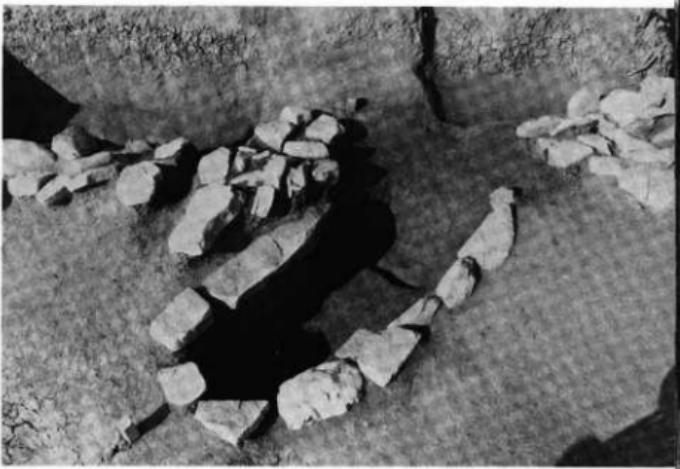


SK 06
遺物出土状况

SK 07



SK 07

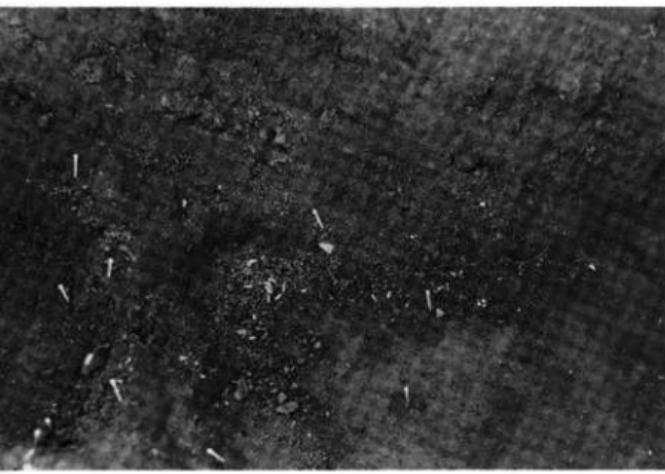


SK 08

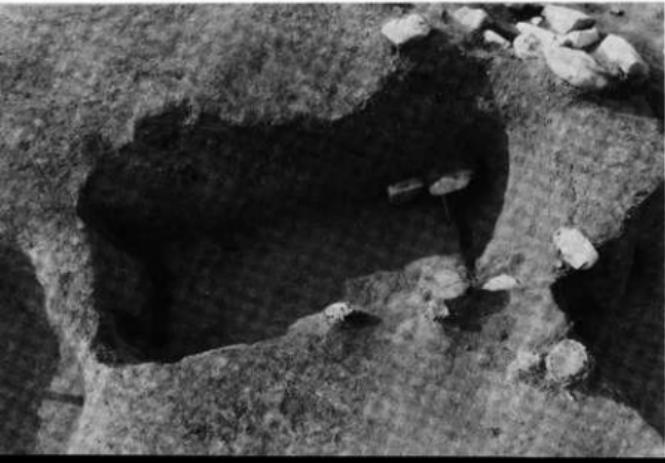




SK 08



同上

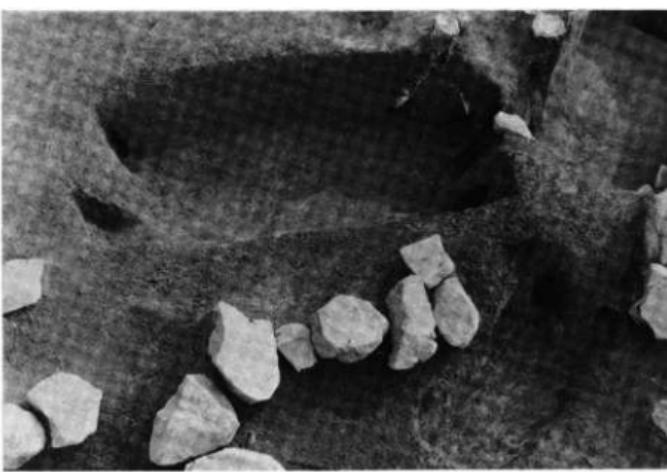


同上

SK 09

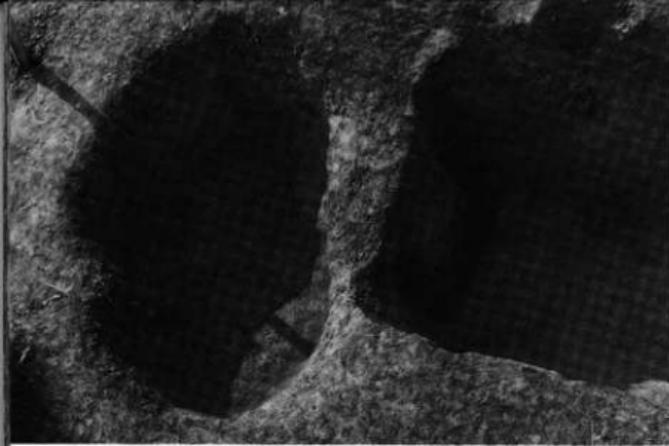


SK 09
(右下はSK 23)



SK 10

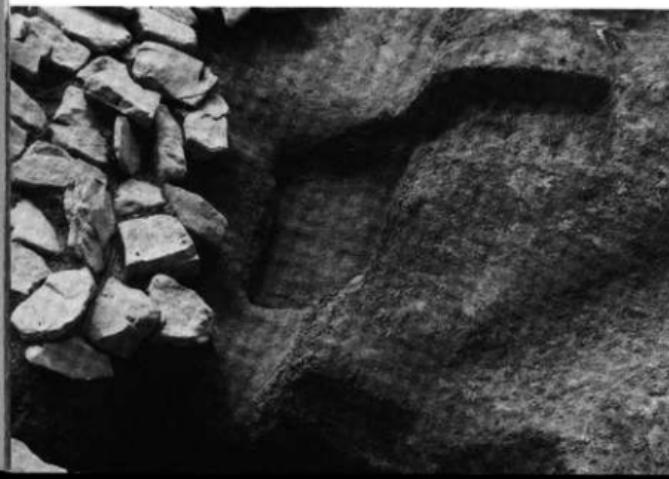




SK 10



SK 11



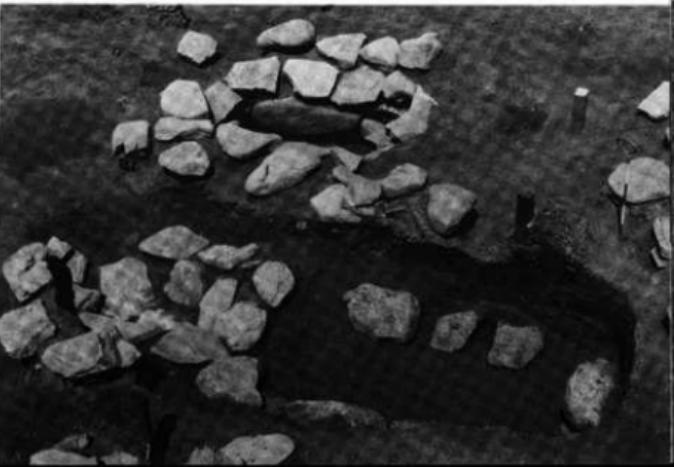
SK 12



SK 13



右上 SK 14
右下 SK 26
左 SK 03



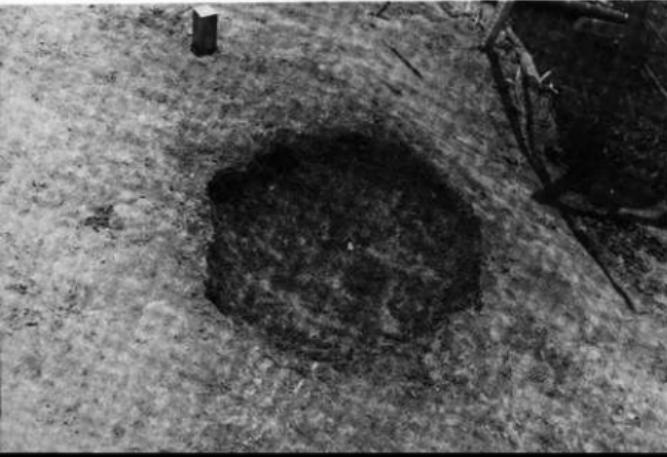
上 SK 03
下右 SK 14
下左 SK 26



SK 15



SK 15



SK 16



SK 17



SK 17



SK 18



SK 19



SK 19

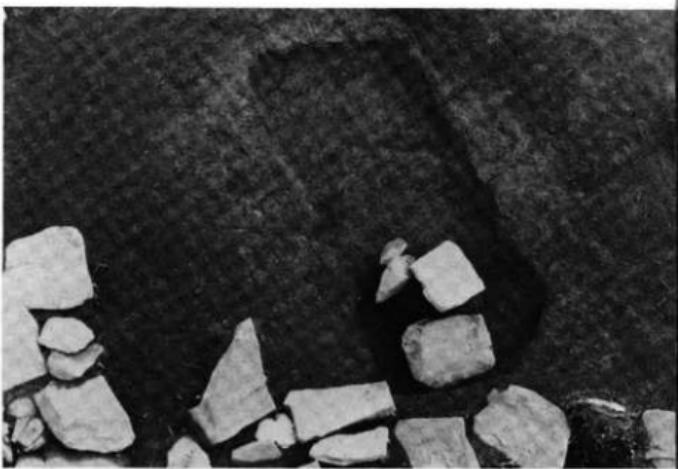


SK 20

SK 20



SK 20

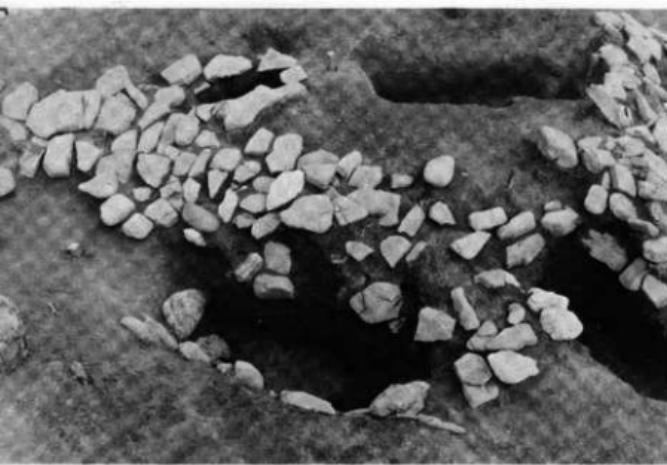


SK 21





SK 21



SK 21

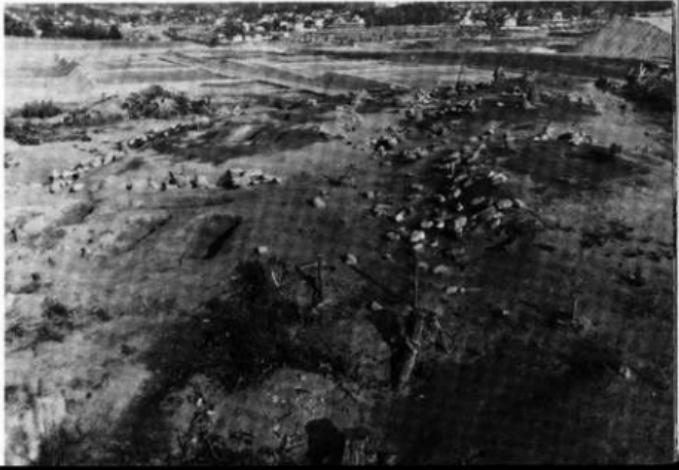
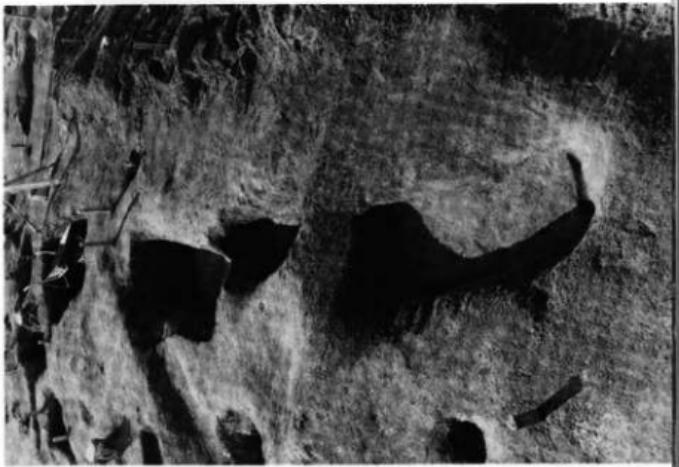


SK 22

SK 23



上 SK 18
中 SK 24
下 SK 25



西からみた
墳丘墓群
右 3.4.5号
左 6.1.2号



填丘墓近景
下 3号
中 4号
上 5号



1号填丘墓
主体部



1号填丘墓西沟
遗物出土状况

2号填丘墓
主体部



3号填丘墓



同上
主体部

